

文化の階層性と文化的再生産

橋本 健二（日本学術振興会）

秋永 雄一（東京大学大学院）

1. 文化の階層性

われわれの社会にはさまざまな形態と質をもった諸文化が存在している。これら諸文化は、歴史的・社会的その他の理由から、しばしば特定の社会階層と結びつき、特定の社会階層を支持基盤とする。しかし、社会諸階層は一般に優劣の関係を持っている。このとき、異なる形態や質を持つ諸文化は、この優劣の関係から自由ではありえない。諸文化は一定の基準に従って評価され、序列づけられるが、この序列づけは階層間の序列と無関係ではないのである。このような事態を文化の階層性と呼ぶことにしよう。すなわち、諸階層が異なる文化を持っており、しかもこれら諸文化への評価が諸階層の序列と関連している状態である。

2. 文化の階層性と文化的再生産

文化の階層性は文化的再生産と密接な関係にある。この点を検討するためには、まず「文化的再生産」の概念を確定しておく必要がある。

文化的再生産とは、文化的な諸過程を通じての再生産である。ここで再生産とは次の2つの過程を含む。第一は、諸階層の世代的再生産である。これは諸個人が親と同一の階層に所属することを通じて、一定の性格を保持した諸階層が存続し続けることである。第二は、階層構造の再生産である。これは各階層の成員の移動や交代にかかわりなく、諸階層間の関係の構造が維持されることである。文化の階層性はこの2つの再生産過程に深く関わっている。

第一に、世代的再生産においては、文化の階層性は重要な媒介過程としてあらわれる。諸階層はさまざまな社会的差異によって定義されるが、これらの差異が一度、文化的差異に変換された上で子に伝達され、この文化的差異が子が親と同一の階層に所属することを可能にする

のである。さまざまな制約から経済的な資本を直接に相続することが困難となっている今日においては、この過程は世代的再生産の代表的な過程となりつつあると考えられる。第二に、構造の再生産においては、文化の階層性は階層構造の正統化の重要な基盤となる。文化の階層性は文化の優劣の評価をとともなうが、この文化の優劣の意識が階層間の格差・不平等の正統化をもたらすのである。ブルデューは言う。「程度の低い、粗野で下品で現金で卑屈な娯楽を否定することは、……高尚で洗練され、私欲とは無関係の優雅で上品な楽しみに満足する人々の優越性を承認することである。これが、芸術や文化的消費が、意識的・意図的であろうとなかろうと、社会的差異を正統化するという社会的機能を果たすべく仕向けられている理由である。」（[1979・1984:7]）

3. 調査の概要

以上のような文化の階層性と文化的再生産の問題に実証的検討を加えるため、われわれは今年5・6月に調査を実施した。対象は、都内・都下17大学の学生。有効回答は1367。質問内容は対象者とその親の文化的活動の内容、対象者の文化的活動への志向性、諸文化活動への評価、文化・言語に関する知識、授業や学習への態度、職業評価、進路意識などから成る。調査の実施にあたったのは橋本・秋永の他、宮島 喬（お茶の水女子大学）、藤田英典（東京大学）、志水宏吉（大阪大学）である。今回の発表は、この5人による共同研究の一環である。この調査にあたっては各大学の多数の教員の皆さんに御協力を頂いた。この場をかりて感謝の意を表する。

4. 文化の階層性とその認知

文化の階層性の構造を明らかにするためには、諸文化への評価の構造を明らかにする必要がある。このため今回の調査では、いくつかの文化的活動を例示して、これらを「上品である」から「上品でない」までの5段階で評定させ、この結果をスコア化することを試みた。表1はその結果を示したものである。

最も高く評価されたのは、クラシック音楽、美術、短歌・俳句など古典芸術にかかわる活動であり、これに中

表1. 文化評価スコア

クラシック音楽のコンサートへ行く	64.1
美術館や美術の展覧会へ行く	62.7
ピアノを弾く	60.4
短歌・俳句を造る	59.2
演劇を見に行く	56.9
フランス料理の店で食事をする	56.7
芸術や歴史にかんする本を読む	55.3
総合雑誌（世界・中央公論など）を読む	52.3
手芸や木工・模型作りなどをする	51.0
映画を見に行く	50.4
テニスをする	48.7
若手作家の小説を読む	48.2
テレビの歌謡番組を見る	42.5
カラオケで歌う	37.3
スポーツ新聞を読む	37.1
写真雑誌（FOCUS・FRIDAYなど）を読む	33.7
パチンコ・マージャンをする	33.6

* スコアは各項目の回答の平均値を平均50、標準偏差10になるように変換したもの

間的な性格を持つ芸術である演劇と、芸術・歴史の本、フランス料理が続く。低く評価されたのは、大衆娯楽に属するパチンコ・マージャンとカラオケ、それに大衆的なマスコミである写真雑誌とスポーツ新聞である。

次にこのスコアを用いて各回答者の文化的活動の内容から個人別の文化スコアを算出し、これを属性別に集計して分散分析を行なった。その結果が表2である。もっとも影響力の強いのは性別である。これは、パチンコ・マージャン、スポーツ新聞という、評価が極めて低く、しかも通常主に男性が行なう（逆に言えば、女性が行うことは適切でないと、社会的にみなされている）文化的

表2. 属性別平均文化スコア

父親階級 $\eta = .149$	経営者・専門職 下級管理職 プチブルジョア 労働者・農民	51.40 50.04 49.23 46.31
父親学歴 $\eta = .152$	高学歴 中学歴 低学歴	51.26 48.88 46.59
母親階級 $\eta = .107$	経営者・専門職 下級管理職 プチブルジョア 労働者・農民 無職	52.00 50.01 50.05 48.22 50.64
母親学歴 $\eta = .225$	高学歴 中学歴 低学歴	53.52 49.29 46.97
大学ランク $\eta = .140$	1（最上位） 2 3 4	51.97 49.56 49.74 48.34
性別 $\eta = .521$	男 女	45.58 56.11

* 親階級は準ブルデュー方式による

* η は相関比

活動が算出基準に入っていることによるものであろう。

出身階級別にみると、もっとも文化スコアの高いのは経営者・専門職の出身者、低いのは労働者・農民の出身者である。また、親の学歴が高いほど本人の文化スコアが高いといふかなりははっきりした傾向がみられる。大学生は入学の時点で選抜されているから、出身階級や親の学歴による差は大きくならないのではないかと予想されたが、結果は依然として大きな差が存在するというものであった。大学ランクによる差もかなり大きい。

次に、文化の階層性に対する認知をみることにしよう。今回の調査では、6つの職業を例示して、それぞれの職業のひとつとがどのような文化的活動を行っているかについてのイメージを「多い」「あまり多くない」「少ない」の3段階で尋ねる質問を設けた。その結果をみると、職業による文化的活動の違いがきわめて明確に意識されていることがわかる。たとえば、「クラシックのコンサートや美術館・展覧会に行く人が多い」との回答は、企業の経営者・役員については33.6%、医者については49.0%に達するのに対して、工場の工員では2.7%、農業では4.8%である。

表3. は、この質問への回答から大学生の認知している各職業の文化スコアを算出したものである。文化スコアと職業威信スコアとの相関係数は0.902であり、文化的評価と職業評価が強く関連していることがわかる。

表3. 各職業の文化的評価

医者	55.05
企業の経営者・役員	51.98
農業	46.89
大企業の中堅社員	45.67
工場の工員	43.74
小売店主	43.49

5. 文化の階層性と階層構造の正統化

さて、このような文化の階層性とその認知は、階層構造の正統化とどのように関係するであろうか。この問題にアプローチする1つの方法として、今回の分析では、諸個人の文化的活動への評価の構造と階層帰属意識、政治的立場との関係を見ることにした。表1. から最も高く評価されている項目と最も低く評価されている項目を3つずつ選び、それぞれについての評価を個人別に見る。

そして、前者と後者の評価の点数の差をとってスコア化する。つまり、「上品」な文化的活動と「上品でない」文化的活動をどの程度明確に区別しているかによって諸個人の評価の構造を区別するのである。両者を明確に区別している（点数の差の大きい）人は強い評価の構造を、明確に区別していない（点数の差の小さい）人は弱い評価の構造を持っているものとする。表4. はこの評価の構造と階層帰属意識、政治的立場との関係を見たものである。

表4. 文化的活動の評価の構造と社会意識

評価の構造	階層帰属意識				
	上	中の上	中の中	中の下	下
強	13.3%	48.9	32.4	5.0	0.4
中の強	9.7%	52.8	29.4	7.9	0.2
中の弱	7.1%	45.6	36.1	9.3	1.9
弱	8.8%	33.2	34.1	15.9	8.0

	政治的立場		
	保守	中道	革新
強	26.3%	50.0	23.7
中の強	29.0%	49.4	21.6
中の弱	30.5%	43.5	26.0
弱	21.6%	44.0	34.4

強い評価の構造を持つ者は自分が相対的に高い階層に属していると考え、弱い評価の構造を持つ者は相対的に低い階層に属していると考える傾向があることがわかる。高い階層に属していると考えことは自己が既存の社会構造に適応していることの表明であると考えられるから、強い評価の構造は社会構造の正統性の承認につながっているとみることができる。一方、政治的立場についてみると、保守的な政治的立場については明確な傾向が見られないが、革新的な政治的立場をとるものは弱い評価の構造を持つものに多いというかなりはっきりした傾向がみられる。政治的立場は既存の社会構造に対する維持（保守）もしくは変革（革新）の志向性を示し、したがって、諸個人が既存社会の正統性を承認している程度を反映したものであると考えられる。弱い評価の構造は正統性の非承認とむすびついているのである。以上から、文化の階層性への評価と正統化の関係についてある程度のことは示唆されたとみてよいだろう。

(橋本健二)

6. 文化の序列化原理

文化の序列化を促す原理としてブルデューが挙げてい

るのは、「必要性からの距離」という概念である。それぞれの「文化」の威信は実生活上の物質的・世俗的必要からの距離が大きいほど高くなり、威信の高い「文化」ほど、それを消費する際に自己目的化の契機が強まり、手段性・世俗性の原理が否定される、というのがブルデューの議論であった。彼の議論が正しいものであるか否か、また、本調査では各「文化」への評価（文化威信の序列）を「上品さ」というワーディングによって捉えたが、「上品さ」がそれぞれの「文化」の実生活上の必要からの距離の大きさを反映するものであるかどうか、これらの問題について検討する必要がある。今回の調査では直接的に「上品さ」の意味内容や各「文化」の「必要性からの距離」の大きさを調べるための項目は用意していない。そこで、SSM調査でも用いられている「重視する仕事の条件」に関する質問項目のなかから経済的・社会的利害に関わる条件についての項目と仕事の内容に関わる条件についての項目を取り出して実生活上の必要からの距離の取り方への一般的な態度を示すものと見なし、それと回答者の各「文化」への評価、各「文化」に関する知識、文化的活動の内容との関連を見ることによって、間接的にこの問題を検討してみた。表5. はその結果の一部を示したものである。

表5. 「文化」と「実生活への距離」

文化的活動	重視する仕事の条件			
	地位	評判	能力	知的
音楽会／楽器演奏	-.140**	-.051	.072**	.048
美術館・展覧会／映画	-.049	-.054*	.067*	.119**
読書（芸術・歴史／総合雑誌）	-.112**	-.113**	.093**	.104**
パチンコ・麻雀／スポーツ新聞	.180**	.012	.051	-.114**

文化に関する知識	重視する仕事の条件			
	地位	評判	能力	知的
西洋文学／作曲家 画家／思想／学者	-.101**	-.097**	.053*	.149**
日本文学 古典芸能	-.059*	-.038	.035	-.001
ブルジョア歌手	.058*	.024	.061*	.039
ハード／オート ディオ／自動車	.075**	.014	.010	.053

「地位」：高収入／高い地位

「評判」：失業の恐れ無し／世間の評判

「能力」：能力発揮の機会／自分で判断できる

「知的」：物を作る仕事／知的な仕事
 「非常に重要」から「まったく重要でない」までの4段階で尋ねた項目を2つずつ合成してスコア化
 ・「文化的活動」は「かなりある」から「ない」までの3段階で尋ねた項目を2つずつ合成してスコア化
 ・「文化に関する知識」は正答・誤答にそれぞれ1点・0点を与え、クラスター分析にもとずいて近いものどうしを合成してスコア化
 ・数値は積率相関係数
 ・**は1%水準、*は5%水準で有意

仕事の条件として「高収入／高い地位」や「失業の恐れ無し／世間の評判」といった、どちらかといえば仕事を手段にして得る物質的・世俗的報酬を重視する態度が文化評価スコアの低い（高い）文化的活動を行なっている（いない）ことと正の相関をもち、「能力発揮／自分で判断」「物を作る仕事／知的な仕事」といった、仕事の内容そのものの享受を重視する態度は文化評価スコアの低い（高い）文化的活動を行なっている（いない）ことと正の相関をもつ傾向のあることがわかる。各「文化」に関する知識や評価との関連についても、ほぼ同様の傾向が見られる。各回答者の「重視する仕事の条件」は、性別を除いて、属性（出身階級・両親学歴・所属大学入学難易度）とのあいだにはっきりとした関連が認められなかったため、一応、それらから独立した、実生活上の物質的・世俗的側面に対して回答者が示す一般的な態度とみなすことができる。このことからただちに、各「文化」への評価の高さの序列（文化威信の序列）がブルデューの言う「必要性からの距離」の大きさによって定まるという確証が得られたわけではないが、少なくとも、文化評価スコアの低い「文化」に親しむことと、実生活上の物質的・世俗的報酬に対して距離を置く態度とのあいだに、ある程度の関連のあることが示されたことにはなるであろう。

7. 「文化」の世代間継承性と階層性

個々人の行なう文化的活動に世代間の類似性がどの程度みられるだろうか。表6. はこれを示したものであるが、いわゆる「高級文化」と「大衆娯楽」のあいだに歴然とした境界があり、その枠内で継承される傾向のあることがわかる。また、回答者本人および親の双方とも、文化評価スコアの低い（高い）「文化」を行なっている人ほど、社会的に高く（低く）評価されている属性をもっている（資料は当日）。さらに、比較的文化評価スコアの低いとおもわれる「文化」（たとえば「油絵を描く」「作曲や演奏をする」など）をやってみたいか否か（志

表6. 「文化」の世代間継承性

本人の 文化的活動	親の文化的活動		
	音楽会／美術館・展覧会／映画	読書（芸術・歴史／総合雑誌）	パチンコ・麻雀／スポーツ新聞
音楽会／楽器演奏	.3120**	.1653**	-.0457*
美術館・展覧会／映画	.3021**	.1776**	.0468*
読書（芸術・歴史／総合雑誌）	.1842**	.2481**	.0418
パチンコ・麻雀／スポーツ新聞	-.0715**	-.0127	.2506**

・数値は積率相関係数

・**は1%水準、*は5%水準で有意

向性）について尋ねた質問に対する回答にも、各回答者の属性および親の行なっている文化的活動とのあいだに同様の関連が見られる。「文化」への趣味・嗜好は親子の間でかなり継承され、しかも、その継承に社会階層による違いのあることがわかる。

8. 暫定的結論

以上から、文化的再生産の2つの側面（「世代的再生産」と「構造の再生産」への文化の関わり）について、どの程度の実証的検討が加えられたことになるであろうか。とりあえず暫定的なまとめをしておこう。

既存の社会秩序は物質的・世俗的報酬の分配の不平等（不平等）を何らかのかたちで正当化することによって維持されている。正当化の原理を文化との関連に限って言えば、「文化」と「職業」に対する評価はかなり一致しており（4.）、また実際に、高い評価を与えられている「文化」に親しんでいる人ほど高い階層に属している（文化の階層性）。しかし、そのことがそのまま正当化の原理として機能するわけではない。5. に示された知見とともに、物質的・世俗的報酬に与かっている階層が高い評価を与えられている「文化」に親しんでおり（7.）、しかも、高い評価を与えられている「文化」に親しんでいる人ほど物質的・世俗的報酬に対して距離を置く態度と親和性をもっているという（6.）、一見して逆説的に見える関係のなかにこそ、文化による社会秩序の正当化作用が潜んでいるといえよう。

（秋永雄一）

<引用文献>

Bourdieu, P., *Distinction*, 1984, Harvard Univ. Press